

- 清里清泉寮の集いに参加して -

教会の門を叩いて間もない私は、「山辺に向かいて我、目を上ぐ」に参加でき良かったと思っている。そもそも、「山辺に向かいて我、目を上ぐ」の意味も分からず。賛美歌にちゃんと「山辺に向かいて」があり、詩篇に該当箇所があることを参加直前に知った程である。活動エリアとなった清泉寮の岩でできた門柱にも、「われ山に向いて目をあげん わが助けはいずこよりきたるべきぞ」と刻印されていた。「わが助け...この所、『もう、試みに合わせないで下さい』というのが目の前の“わが助け”なのかな」と今の私には想えた。

高原の霧と静寂に包まれ、夕礼拝、朝の祈り、食事の祈りは、三・一教会らしい、堅くるしさのない、素朴な祈りに安堵できた。時折の降雨にも合ったが、自然のなかでは人間は小さな存在。雨に打たれるも、気には止めなかった。雨はいつか止むのだから。清里高原の秋は、空気が澄みわたり、雲間の山々も、小径の木々の紅葉も、みいんなそれぞれにちがい、そしてきれいだ。自然も神さまに創られ、愛されているのだと想った。

近くの清里聖アンデレ教会に行った。珍しい畳敷きの教会で、聖堂は、川俣溪谷から運んだ石をアーチ敷きに積み上げられ築かれた。畳に座り込み、賛美歌をアカペラで歌うことになった。広い礼拝堂に賛美歌が響きわたり、気付くと、伴奏付きで唄うより、唄のテンポがたよやかで、みいんなの気持ちがいつもより更に一体になっている感じがして心地良かった。何曲も歌い続けたかった。



番外編であるが、みずからの思い出として次の一首(?)を。

夜更けまで 各自の辛苦も 語ったけれど
神さまの愛に 隔たりはない

門柱「われ山に向いて」